

# 佛教考古學とその課題

網 干 善 教

## (一)

印度における佛陀の教説が西域、中國、半島を経て我が國に東漸し、六世紀後半以後日本の社會、政治、文化等のあらゆる面に中樞的役割を果たしてきたことはいままでもない。

ところでこのような佛教流布の過程についての諸問題を研究の對象とする場合、それぞれの目的、對象、方法論等の相違によつて、佛教に關する種々の學問が體系化され、組織化される。あるいはいろいろな學問の立場から特に佛教を對象として研究する學問分野があるといった方がよいかも知れない。

日本佛教の場合を考えてみても、公傳として記録されて以來、今日まで約一四〇〇年間、佛教がそれぞれの時事において有形の事象として存在し、また影響を與えたであろうし、それが時間的な推移と共に形式的にも大きく變化したこともある。また新しく傳えられた宗義や宗派によつて各々異つた變遷を示したこともある。今日佛教遺跡、佛教遺物という言葉と呼ばれているものはそれらのうちにあたるものである。このような佛教遺跡、遺物を特に研究の對象とした學問の體系として「佛教考古學」を稱呼される一分野があることは知られているが、このような呼

び方は多くの場合、考古學者の間で使用されてきたものである。しかし翻つて考えてみると佛教考古學という名稱は多くの人たちに使用されているにもかかわらず、佛教考古學とはどのようなものであるか即ちどのような目的をもち、どのようなものを研究對象とし、どういう方法でこれを究めていくかといった問題について從來あまり重要視されていなかったように思われる。ただ一般概念として、極めて常識的に「佛教」という概念と「考古學」という概念を連接させ、「佛教を對象とする考古學」といつた考古學のなかにおける特殊な研究分野を示す學問體系として理解されている場合が多かつたように思われる。それは多少言葉のニュアンスの違ひはあつても、ただ漠然とした受けとり方で、佛教を背景にもつ文化現象のうち考古學としての研究對象となるようなものを指して「佛教考古學」とし、一つの學問體系を組織しようとする傾向が強く働いていたのではなからうか。したがつて佛教考古學を專攻する者は佛教學徒としてよりもむしろ考古學徒の中に輩出し、専ら考古學的研究法によつて佛教學あるいは、佛教史學の一分野を究明するものと理解されてきた。このような佛教考古學に對する基本的な態度は一応それでよいとしても佛教考古學に臨む態度については多少不明確と思われるものがあると感ずる場合がある。

そこで佛教考古學というものをどのように考え、これをどのように推進していくかという私の基本的な態度について述べてみたいと思う。

## (二)

從來佛教考古學をどのように解釋し、その研究對象をどの範圍に考えられてきたかについて代表的な見解を示してみたい。

先ず昭和十一年三月一日から同十二年十二月三十日まで雄山閣から刊行された「佛教考古學講座」十五卷を擧げることが出来る。

その第一卷、卷頭に柴田常恵氏の「佛教考古學概論(一)」「序説」という項があり、このなかに佛教考古學に對する基本的な考えがかなり詳細に記述されている。そこでこの論述を讀んで「佛教考古學講座」が編集された時點における「佛教考古學」の概念を調べてみる必要がある。

柴田氏は冒頭において「佛教における考古學的研究は」と述べられている。これは佛教考古學の「學」としての立場を端的に表現されたとみることが出来る。續いて「印度」「中央亜細亞」「安南」「中國」における英、佛學者の成果を略述されているが、その中で「遺跡、遺物に基く考古學的研究が試みられ」「佛教の考古學的研究に盡す所また甚だ大なるものがある」「佛教の(又は佛教に關する)考古學的研究が行われている」という表現が隨所にみられる。

次いで「佛教は世界に二大宗教の一として亜細亞の住民は大半之に歸する所として……亜細亞の文化なり、政治なり、若しくは民情を知らんと慾せば、苟も佛教を除外しては到底その眞核に觸れることは出来ぬ。隨つて亜細亞の考察は總て佛教の研究を促進せしめ、哲學的に教理の研鑽が進められ、思想發展の迹を探らんとするものがあると共に、一面において堂塔の廢趾や佛像や佛具の遺品に基いて考古學的に文化の推移を知らんとするに至つた。殊に佛教を擁する幾千卷の經典は内容極めて豊富にして……(中略)……他の宗教の及ぶ所でない」とアジアにおける佛教の果してきた意義とそれを究明する價值について述べられ、續いて「考古學的研究の對象となるべき遺跡、遺物は焼失の危險を多分に有する木造建築を主とし、また濕氣に富んで毀損の憂ひある風土なのに關らず、依然として善く伝えらるるものが豊富に存して居る」とし「佛典に依る教理研究もなることながら、書史學の方面である筆寫

なり刊行の様式を考察しまた經卷たる紙質が如何なる種類なるかを識別し書體、裝溝より収藏の方法等について相當注意が拂われている。……(中略)……豊富な佛典が我國に護持されると共に上述の方面より幾分の考察が拂われていたが、之れ即ち考古學的研究の第一歩と稱すべきものである」とし、また佛像については「製作の技術を觀察して時代の鑑別を試みるに至るのは自然のことで、其事が十分な研究結果に持つ根據あるものならずとも、殆んど何れかの佛像に對して行われている。左ればこそ各地の寺院に安置される佛像は本尊は云う迄もなく其他の佛像についても多くは其作者を語り、傳來を説くを常とし、夫れが専ら信仰方面より來れるより、遂には寺院に傳ふる由緒は妄誕不稽の甚だしきものとさへ云われるに至つたが、考古學的研究の閃きは由來久しきを覺える」また堂塔以下の建造物についても「堂塔などの建物に對する知識の増し、比較商量して沿革の狀態に系統づける迄に至らずとも或程度の考古學的研究が行われて居つた。……(中略)……多くの佛寺の遺瓦を蒐集して瓦譜の編纂を見る程として、近代の研究を待つ迄もなく之れが研究を行われていた。」と述べられている。更に佛教に使用される器物についてもその研究考古學的の成果に見るべきものがあつたとされ、續いて墳墓、法要行事等についても概略述べられている。そして「佛教に關係のある考古學的研究としては、美術史や建築史は最も發達せるものと認められ」としながら、その方法論において佛寺としての性格を究明するためには尚缺陷があるとの立場で批判する。そして考古學が希臘、羅馬に其の淵源を有しなから、一科の體系を備ふに至つたのは近代であり、「其の研究の目的とするところは……時代の前後を問わず、國の東西を別たず過去の人類による物質的遺物を對象として研究するにある。随つて廣く世界の人類が其發生以來、殆んど近代に至る悠遠な期間に亘れる遺跡、遺物は何れも其研究の領域に屬する。……考古學と云へば直に極めて古代の事柄のみの研究の様に解するものがあるが、決して然る性質の學問でなく

遙かに後に至るも取扱うのである……研究の便宜上……地理や民族の關係以外に、特別な文化を中心として研究することも出来る筈で、現に之が行われているから佛教考古學として、佛教に關する事物の研究のために、其遺跡、遺物を對象として爲すものが起るべきである」と考えられ「佛教考古學なる名稱は、未だ世人の耳に熟せざる所たるべきも、佛教の遺跡遺物に依る研究は基督教考古學が歐米に於いて存在する程として其内容の遙に豊富なる佛教に此事あるべき筈で……佛教に關する繪畫、彫刻、建築、工藝等に對して夫々の學問によつて開拓せられることとて別に佛教考古學として立入る餘地を存ぜない様にも思われるが、研究の對象が同一の事象であつても、其立場を異にすれば何等差支はない筈である」とし「佛像や建築でも別に考古學として進むには何等矛盾はない」「佛教の全體に亘る遺跡、遺物を網羅し、此等の間に孤立の状態になる知識を聯絡せしめ得るのであるから、此處に至つて從來の學問と相並んで其の存在に意義あらしむるので、佛教考古學の組織を促す所似である」と論述し、結んである。さてこのような考えのもとで編集された「佛教考古學講座」はどのような構成になつてゐるだろうか。

この講座では佛教考古學を次の七編に分類してゐる。

- 一、經典
  - 二、佛像佛畫
  - 三、佛具法具
  - 四、建築
  - 五、法要行事
  - 六、墳墓
  - 七、その他
- しかしこの分類だけでは意圖されてゐる佛教考古學の概念を理解しにくいので各編にわたつて、その代表的な項目を擧げてみると次のようなものであることが知られる。

- 一、經典編
  - 二、佛像佛畫編
- 大藏經、各宗教典、裝演、版經、埋經、經塚等

造佛法（佛像鑄造法、彫刻法）、佛像佛畫起源、淨土教藝術、禪、密教藝術等

### 三、佛具法具編

密教法具、華鬘、香爐、數珠、如意、雲版、磬、幡等

### 四、建築編

佛寺建築史（源流、奈良——現代建築史）各宗建築樣式（奈良六宗、天台、眞言、淨土教、禪、日蓮宗等）

### 五、法要行事編

各宗行事作法史（法要行事概況、由來、宮廷、貴族、佛教）各宗行事作法（眞言、天台、淨土教、禪修驗道寺

各宗）盆火、佛教音樂

### 六、墳墓編

概説（奈良、中世、近世）塔碑（寶塔、無逢塔、板碑、墓碑、位牌等）

### 七、その他

佛教教育史、宗教批判の態度、高僧名著、國文學等

以上のように文中にみえる佛教考古學に對する基本的な考え方、そしてそこに示された内容からして、一應意圖されているものを知ることが出来る。しかしながら佛教考古學そのものに對する考え方、その對象とする内容については批判の餘地はあると思う。今一例を擧げておけば、このような六つの分類が、そして擧げられた内容が果して佛教考古學の概念からみて適切であるかどうか、例えば佛像佛畫編における「古代佛像の人類學的考察」法要行事編における「佛教音樂」「盆火の行事」等はいうにおよばず「佛教教育史」の一編も編集者が無理に講座に編入

しようとしたため、分類されるべき項目がなく、一般に持つている「佛教考古學」概念からみ出した内容であり、佛教考古學の本質論をまたずして矛盾することが容易に知られるであろう。これが講座の編成という特殊な意圖から出發しているものであつて、嚴密な意味にこだわらなくてもよいという考え方があれば、それには「佛教考古學」という語を敢えて使用する必要はなく「佛教文化講座」といつた表題にすべきが良心的であろうと考える。苟しくも序説に述べられたように學問の體系として佛教考古學の確立を望まれているならば、當然佛教考古學とは一體何であるかを考え、その上に研究對象、方法論について一貫した編集を示されるべきではないかと思われる。即ちこの場合序説に意圖されたものが内容記述をみると建築史、美術史の一分野にしかすぎない結果に終つていゝと見做されるべきであらう。

次に昭和十六年六月二十日、東京考古學會より刊行された「佛教考古學論叢」(考古學評論第三輯)がある。その冒頭に次のような一文がみられる。

「佛教考古學とは如何なるものであるべきか、という問に對して、いま編者は答えることは出来ない。しかし佛教史や佛教美術では究め得ない様な、日本の生活の中に深く浸潤した文化現象を理解するために、ここにも考古學的研究が可能であり、必要であることを信じて疑わない。それを佛教考古學と名づけようと思うのである。佛教考古學とは如何なるものであり得るか。それについていま本輯に集め得た、各々題材と方法とを異にする六雄篇を擧げて示そうと思う。明敏なる讀者が、もしそこから如何にあるべきかの結論を導き出されるならば、ひとり編者のみの喜びにとどまらないであらう」と述べ次の如き論文を輯録されている。

古瓦より見た日鮮文化の交渉

石田 茂作

攝河泉出土古瓦様式の分類の一試企

藤澤 一夫

本邦に於ける提瓦の研究

木村捷三郎

西大寺創立の研究

田中 重久

美濃國古位牌の研究

片岡 温

陸前宮城郡の古碑

松本 源吉

この論叢における編者は「佛教考古學」の確立とその研究の對象、方法論にかなり慎重な取扱ひ方をしながら、とにかくこれらの論文を通じて佛教考古學とはこのようなものであるという一指向を示されている。そして集められた論文は「古瓦」「位牌」「古碑」そして「寺院」の文献、伽藍、古瓦より創建に關する考察等であつて、これらの内容を通じて各自が佛教考古學そのものに對する概念を導き出すよう要求されている。

次に昭和三十八年三月三十一日、刊行された日本考古學協會編「日本考古學辭典」に記述された石田茂作博士の見解を見てみよう。

石田先生は佛教考古學を定義して「佛教關係の遺跡、遺物を對象とする考古學をいう」と述べ、續いて佛教遺跡、佛教遺物として後述の如き項目を擧げられ、最後に「こうしたものを通じて、佛教の過去を探究せんとするのが佛教考古學である」と述べられている。

さてそこで石田先生の擧げられた項目を表示すれば次の如きものとなる。

(一) 佛教遺跡

寺院址・經塚・瓦塔遺跡・瓦窯跡・火葬墓・磨崖佛



(二) 佛教遺物

イ 佛像

金銅佛・木彫佛・乾漆佛・石佛・鐵佛・瓦佛・押出佛・板佛・佛畫・印佛・摺佛・繡佛

ロ 經典

貝葉經・寫經・版經・柿經・滑石經・瓦經・銅板經・一石經・貝殼經・刺繡經・泥塔經・寶塔經

ハ 佛塔

木造塔・石塔・鐵塔・泥塔・瓦塔・印塔・三重塔・五重塔・七重塔・九重塔・十三重塔・多寶塔・寶塔・

寶篋印塔・五輪塔・相輪塔・卵塔・傘塔婆・寶珠塔

ニ 佛具

a 莊嚴具

厨子・幡・草臺・打敷・前机

b 供養具

香爐・花瓶・花籠・常花・燈籠・燭臺・香印座・常香盤・佛飯盆・闍伽桶

c 梵音具

鐺口・雲版・磬・鉦・鉢・木魚

d 經具

經帙・經籤・經机・經箱・經櫃・經筒・香經臺

## e 僧 具

袈裟・尼師壇・念珠・如意・拂子・鐵鉢・頭陀袋・錫杖

## f 密教法具

金剛鉢・金剛杵・金盤・四槩・六器・二器・大壇

このように石田先生は佛教考古學の研究の對象となるべきものをかなり具體的に示されたが、そのなかで「これらのものの中には佛教美術・工藝の對象に共通するものもある」と述べられている點注目すべきである。

以上のように多少雜然とした佛教考古學の目的とその對象及び研究の方法について從來どのように考えられてきたかということを知るために、その代表的なものと思われる見解を擧げてみた。これらの記述によつて、佛教考古學の概念が一應理解できると思われる。しかしそれらの分類はともかく、具體的に擧げられた各々の項目を通觀してみると、一體佛教考古學とは何を目的とし、何を對象とし、どのような方法論の立場を考えなければならないのかという問題について若干疑問が生じてくる。したがつて以下において佛教考古學の本質とその課題について考えてみたい。

## (三)

悠久五千年の歴史をもち、アジア諸民族の精神的支柱をなして來て佛教を研究の對象とするのには、自らその究めようとする方法論において佛教に關する諸々の學問が成立する。

就中万卷の經典の中に示された教説とその思想を究明せんとする教理的研究とその教説が歴史と共にどのように

展開し、影響を與えてきたかという所謂文化史的研究に大別することが出来るであらう。蓋し前者にはその主流である佛教學、宗學そして思想學、哲學、倫理學等々が含まれるのであり、後者には教理史、佛教史、宗派史、更に佛教建築史、工藝史、美術史、經濟史等々の廣範な分野が包括されると考へる。

さてこうした中において佛教考古學をどのように考へればよいのであらうか。

それは一般概念としては「佛教乃至佛教文化を考古學的研究方法によつて考察し、それを體系すける」といえるであらう。

これは柴田氏の表現をかりれば「佛教考古學として、佛教に關する事物の研究のため、其遺跡、遺物を對象として爲すものが起るべきである」とされ、石田先生は「佛教關係の遺跡、遺物を對象とする考古學をいう」と述べられてゐることにあたる。

しかしそれには二つの考へ方があつて、その一つは「考古學という學問體系、及びその方法論によつて、佛教に關する遺跡、遺物に限つて研究の對象とする立場」と、他は「佛教研究の一つの方法として、考古學方法あるいはその成果を取入れよう」とする立場が考へられる。こうした場合前者は「考古學」の一分野として「佛教考古學」を考へてゐるのであり、その多くは考古學を專攻する人たちによつてなされるものである。しかし後者の場合となるとそれは佛教學乃至は佛教史學の一分野として、考古學研究法を借りるところの「佛教考古學」が成立することになり、主として佛教學者あるいは佛教史學者が行う方法である。この二つの考へ方は一見相通じ、相似る性格のようであるが、所詮目的、方法を異にしたものであつて決して同一のものではないと考へる。すなわち考古學專攻者が考へる佛教考古學の目的は考古學の立場に立脚した、佛教の事象であつて、後者の場合、それはあくまで佛教

教理あるいは佛教教説の歴史的發展を目的として考えていくべきである。この場合、佛教考古學も佛教民俗學もそして佛教音樂も同じ立場において考えられるべきであろう。

一例を示せば二葉憲香先生が高著「古代佛教思想史研究」に蘇我氏佛教の性格を考察する一つの資料として飛鳥寺における伽藍配置の問題や、「古墳時代と佛教時代との接續」においては塔と金堂の問題等を考察されていることは佛教史學者としての立場から考古學上の成果を取扱われていることがわかる。しかしそれは佛教考古學の目的でなくして、あくまでも馬子の舍利信仰を通して蘇我氏佛教の性格を考察し、律令佛教の源流を論證されようとした日本佛教史の問題に發展するものである。

このように考えてみると、佛教史學として考える佛教考古學には、佛教史學的研究方法論が確立されるであろうし、考古學と一分野として佛教事象を對象として研究される際にはあくまでも考古學的研究方法論の立場が確立されなければならない。

凡そ學問にはその主體となる目的、研究方法論があり、しかるべくして自らの學問が確立されると考える。しかし一方その學問の成果や研究方法が他の學問の進む過程に、補助的な役割を果すことがある。しかしそれはその學問が目的としている主體性ではなくして、あくまでも補助的な立場である。

例えば寺院建築についてみると、佛教學、宗學の立場からみれば、佛教教説あるいは宗學の弘演のために建立されたものであつて、それはあくまでも佛教、宗義の本義を具現している。だからこそ佛教寺院としての特色ある殿堂が建立されているのであり、また宗義に則つて各宗派の特徴ある僧伽藍摩(Saṅghārāma)の配置がみられるのである。

すなわち眞言には金胎兩部を形どつた伽藍があり、眞宗には西方淨土思想に基く伽藍構成を示している點はこのことを現わしている。

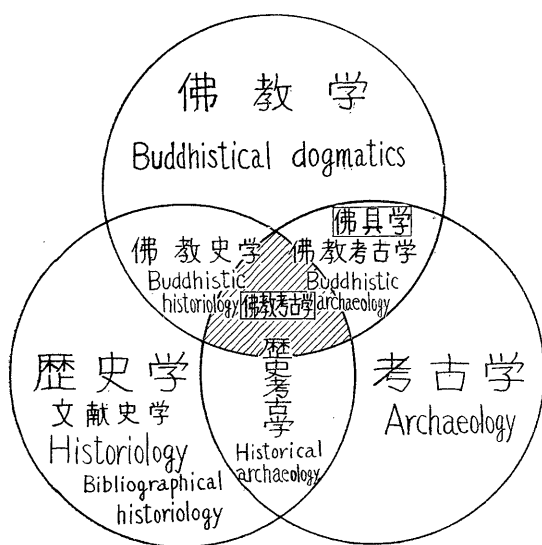
したがつて僧伽藍摩の配置が佛教、宗義の具體的顯現として建立されたものである以上この面から寺院建築をみて教理、宗義をみようとするのは明らかに「寺院を通じてみた佛教教理」であり、「若しそれを通して教説宗義のあるいは佛教文化の時代的變遷としてとらえよう」とすれば佛教史の方法である。「建築そのものの推移變遷」をみる建築史學とは立場を異にするものである。したがつて佛教考古學の對象とする「佛教建築」とは如何なるものかを考えよいのであろうか。それには先づ佛教考古學の方法論を考へてみた上で、取扱うべきと思うのでここではふれないで、後節に待つことにする。

そこで考えなければならないのは「佛教」に關する遺跡、遺物を考古學上の研究對象として考察しようとする「佛教考古學」は、當然「考古學」の一分野として、その研究方法によらなければならない。

元來考古學は Archaeology と呼ばれている如く、古物學、古代學としての立場であり、ギリシャ、ローマにおいては美術品を中心とした比較研究として發展してきた。それが十九世紀に入つて型式學的研究法 (Typological method)、層位學的研究法 (Stratigraphical method) が確立され、加えて土俗學的研究法 (Ethnographical method) が重視されて、今日の考古學的研究法 (Archaeological method) の基幹となった。

したがつて佛教考古學も、その研究方法として、このような method の上に確立すべきものである。ただ一般考古學 (Archaeology) と異なるところは、その研究の對象とするものが、佛教 (Buddhism) という限られた、特殊な對象についてのみ行われる性質のものである。

佛教は宗教であり、教説教理 (Dogma, Doctrine) が主體であり、形となつて現われる佛教の文化現象の背景には、その起因となるべき教理が存在する。したがつて一般考古學の method の他に當然教理的研究法 (Dogmatical method) が加えられなければならないと同時に、その教理論 (Dogmatics) がどのように史的に展開されてきたかという佛教史 (Buddhistic history) の立場も考慮しなければならない。これが重要な研究法となることを注意すべきである。すなわち佛教考古學が考古學の一分野であると共に他の先史、原史考古學と區別され、獨立



した學問體系が成立する所似であると思うのであり、これが佛教考古學 (Buddhistic archaeology) と稱するものであらうと考える。

しからば佛教考古學が單に考古學の一分野でなくして、その研究方法論を踏襲しながらも獨立した學問體系を確立するために、當然付加される方法論のあることに佛教考古學の特性が存在すると見ることができ。

蓋しヨーロッパにおいては「キリスト教考古學」が確立され、またわが國においても「神道考古學」が成立している。佛教考古學を含めていづれも廣義の、「宗教考古學」と總稱されてしかるべきものである。ただ神道考古學はわが國固有の神道の諸現象を對象として考古學的資料及び方法論によつ

て考察し、祭祠遺跡あるいはそこから發見される祭器類等を中心として、古代における神道信仰思想あるいは、その形態を究明する目的をもつた學問體系である點、注目すべきであらう。

而して佛教考古學なるものを次の如く考えてみてはどうなのだろうか。

いうまでもなく佛教は宗教であるからしてそこには當然敎説、敎理が存在する。即ちそれは佛教敎義であり佛教思想であり、佛教哲學、佛教倫理等々でもある。そしてそれが具體的な形に示されたのが佛典である。とすると佛典を通じて、敎理、思想、哲學等を明らかにせんとするのが所謂「敎學」である。一般に佛教學 (Buddhistical dogmatics) と稱されるものである。一方には歴史學 (Historiology) が存在する。したがつてこの佛教學と歴史學と内接する部分が所謂佛教史學 (Buddhistic historiology) の範疇である。しかしこの佛教史學のなかには當然敎理史 (Dogmatical historiology) も重要な一分野であることはいうまでもない。他に佛教社會史、佛教經濟史等の一分野も包括されるものである。

次に歴史學 (Historiology) 特に文献史學 (Bibliographical historiology) と考古學 (Archaeology) の兩田の内接する部分は所謂歴史考古學 (Historical archaeology) と稱されるものであることはいうまでもない。

さてそこで佛教考古學とは一體この三者とどのような關係 (佛教學、歷史學、考古學) になるのであろうか。凡そ佛教考古學には廣義の佛教考古學と狹義の佛教考古學があると考える。すなわち廣義の佛教考古學に包括されるものは佛具學とそして狹義の佛教考古學であると思う。

この場合問題は佛具 (Buddhist altar fittings) であらう。即ち佛具はすべて敎説に由來するものである。したがつて佛具の意義についてはそれは佛教敎理ひいては宗義と密接な關係にあることはいうまでもない。しかし佛具

そのものの形態なり用途は時として變遷するものである。しかしかつてある場合においては考古學的研究に待たなければならぬ。しかし現在使用されている佛具そのものについての研究は考古學的研究の對象にはならない。そして佛具は多くの場合、傳世的なものである。ここでもう一步省つて考えれば、傳世品を主とした研究は果して考古學研究の對象とみるかどうかということに大きな問題があるように思う。私はむしろ傳世遺物は考古學の對象として取上げないことが原則と考えている。しかしそうした佛具が時として考古學的遺物の對象となり得ることもある。しかしそれは發掘調査という作業を通じて現われた場合のことである。例えば寺院址の發掘調査の過程における鎮壇具の検出や、佛舍利等の出土はこれを意味している。この場合傳世的なものではなく、むしろ考古學的方法による復原研究を必要とするからである。そしてこの作業によつて復原されてはじめて當時における佛具としての意義が考察されるのであり、佛教學と考古學の兩者の研究對象になり得るのである。したがつて佛教學と考古學の圖の内接する一部は教理的研究法を含めた佛具としての正しい處理が出来るのであつてこれを假に佛具學とし、廣義の佛教考古學の一部を構成するものと考える。

次に狹義の佛教考古學とはどのようなものと考えたらよいであろうか。それは上述の如く獨立した佛教學、歷史學、考古學が各々内接する範圍に佛教史學、歷史考古學、廣義の佛教考古學を考えた。その三つの學問の範疇、更にそこに生じた三つの新しい學問の範疇が相重なる部分——これが狹義の佛教考古學であると考え。すなわち、佛教學と歷史學に内接する佛教史學、歷史學と考古學の内接する歷史考古學、考古學と佛教學の内接する廣義の佛教考古學（假に佛具學）これが重複した學問の範圍において、その研究對象となる部分、これが私のいう「佛教考古學」であると考え。



よつてここにいる佛教考古學とは佛教史學、歷史學、佛具學の一部分に共通する學問の位置付けであり、佛教考古學はそれらの一部に融合したところに、獨立的の性格をもたすべき學問體系であらうと考える。而して狹義の佛教考古學の目的とその成果は佛教史學、歷史學、佛具學の目的と成果の一部を形成するのに共通性をもつものと考えてよい。換言すれば三者の成果を相入れ形成された學問の位置ではなからうか。したがつて佛教考古學は三者の學問的方法論に俟つべきものが多々あるように思われる。すなわち佛教考古學を推進するためには絶えず佛教學、(主として教理、教説) 歷史學(主として佛教文獻史學)とを取入れた考古學の一分野であらねばならない。

#### (四)

さて廣義の佛教考古學を佛具學と狹義の佛教考古學とを區分した所以はどこにあるかをもう少し考えてみる必要がある。先きに佛具は教義に由來するものであると述べ、また傳世的遺物は多くの場合考古學の對象として考へない方がよいのではなからうかと述べ更に現在のものは考古學的資料として価値のないことを主張した。ここにいる佛具とは廣義に解釋して佛法弘演のための法具とし、その中には佛像、佛殿、經卷、繪畫、工藝、僧具を含めるものとするならば佛教建築史も美術工藝史もすべて包括される。そこで注意すべきは先述の諸論致に見られる佛教考古學に對する考え方である。

柴田氏が「佛教考古學講座」の冒頭に述べられた「佛教における考古學的研究は」、「佛教の考古學的研究に盡す所……」「佛教に關する考古學的研究は……」等と述べられている考へ方はその理解の仕方によつて佛教を研究するための一つの方法として考古學的研究による場合があるとも推察することが出来る。そう考へると佛教乃至佛

教史の方便として考古學がその一手段にしかすぎないとも理解出来る。しかしこのような考え方に理解すると若干問題があるように思う。すなわち前述の如く佛教學の立場で考古學的研究を行う場合と考古學の立場で佛教學的研究を行う場合とは多少意味を異にするのではないだろうか。

「佛教考古學論叢」の序文にみられる「佛教史や佛教美術では究め得ないような、日本の生活のなかに深く浸潤した文化現象を理解するために考古學的研究が可能である。それを佛教考古學と名付けよう」という論旨に対しては概ね理解出来る。すなわち「佛教史や佛教美術で究め得ないような」という考え方は他に考古學的方法論のあることを示している。

しかしこの場合佛教考古學に對する基本的な考え方は理解出来るとしても「佛教考古學とは如何なるものであるか、それについていま本輯に集め得た、各々の題材と方法を擧げて示そう」と述べられた内容については私見として疑問がないわけでない。これは後述するとして、より明確に佛教考古學の本質を示されたのは石田先生であり、「佛教關係の遺跡、遺物を對象とする考古學をいう」と述べられた「日本考古學辭典」の論述は、從來の考え方は異つて、より正確に表現されたもので、主体性は考古學にあることを物語っている。したがつて「佛教における考古學的研究」よりもむしろ「佛教遺跡、遺物を對象とする考古學」といつた解釋が現在考古學の一分野として行われている佛教考古學に對する正鵠な理解であろう。この場合もただ「佛教遺跡、遺物」をどの範圍に限定するかについて若干疑問が生じる。

それでは佛教考古學の對象とは何であるかを考えなければならぬ。先に少しく觸れたように傳世品や現在製作の資料を考古學の對象として考えない方がよいという基本的な態度は變らない。それは柴田氏の佛教考古學とは

「時代の前後を問わず、國の東西を別たす、過去の人類による物質的遺物を對象として研究するにある。随つて廣く世界の人類が其發生以來殆んど近代に至る悠遠な期間に亘る遺物、遺跡は何れも其研究の領域に屬する」と述べて續いて「考古學といへば直ちに極めて古代の事柄のみの研究の様に解するものがあるが、決して然る性質の學問でなく、遙かに後代に至るも取扱うのである」と述べられた論述に對する疑問である。勿論これには何時から何時までのものと限定すべき性格のものではないけれど、その資料が佛具をふくめた佛教考古學的遺物すべてと解釋する立場に立つて「殆んど近代に至る」「遙かに後代に至る」となるとそこにある矛盾が生じて來ないだろうか。私の場合も住職として自坊に繼承されて來た什物や亡き先代から傳受された僧具を管理所有している。これが果して佛教考古學的遺物の對象になるだろうか。この疑問を明らかにする爲に例を示して私見を明らかにしておきたい。例えば古墳時代に製作され、古墳に使用された埴輪があり、これを模して明治時代にその模作品を製作したとする。この場合模造された埴輪を果して明治時代における埴輪として資料的価値を有すると考えられるだろうか。少なくとも現在の考古學の方法論においては無価値なものと抹消されている現狀ではなからうか。佛教考古學に於ける資料についても同じことが考えられると思う。換言すれば遺跡、遺物といへどもすべてが佛教考古學の研究對象になり得るかというとは決してそうではない。このように考えると現在寺院の殿堂として建っている建物は、信仰の對象として崇められている佛像は、それが飛鳥、奈良朝に逆るものとはいへ、決して狹義の佛教考古學の對象とはならない。勿論先述した如く、廣義の佛教考古學として假に佛具學と稱したものまで含めればそれは明らかに對象となり得るけれど、むしろ狹義の佛教考古學の對象には屬さず、建築史、美術工藝史の範疇に屬すべき性格のものである。この點先きに擧げた柴田氏の「佛像や建築でも別に考古學として進むには何等矛盾がない」と述べられてい

る點とは全く逆な立場に立つものである。でなければ佛教考古學イコール佛教建築史になり、イコール美術工藝史になつてしまふ。ただそこには方法論の違いがあり、立場の違いがあるといつても、結局は同じものになる性格のものである。「佛教の全体に亘る遺跡、遺物を網羅し、此等の間に孤立の状態にある知識を聯絡せしめ得るものであるから」とあるが、果して何が孤立しているのか、それに對して佛教考古學がどのような方法で聯絡を結び得ることが可能なのかについて明確でなく、ただ單なる抽象的なものにすぎないと思う。例えば「凍れる音樂の塔」と異名される奈良藥師寺の三重塔を佛教考古學としてどういう立場で考察すべきなのだろうか。そこにある型式學的研究法は悉く建築史の問題であり、塔そのものの教理的意義は佛教學の問題である。「そこに何ら矛盾がない」といわれるけれど大きな矛盾を感じる一人である。この點石田先生は佛教考古學の對象となる佛教遺跡、遺物を項目別に擧げられたあと「こうしたものを通じて、佛教の過去を探究せんとするのが佛教考古學である」と述べられ、更に「これらのものの中には佛教美術、工藝の對象に共通するものもある」と考えられている點、美術史、工藝史と佛教考古學の主體性と同じものなのかどうか不明である。

そこで先きの述べた問題點である傳世品と現在品は佛教考古學の對象とはならないとした所以はこうした考え方に基くものである。

さてそこで、どうすればこれをその各々の立場の主體性が確立されるのであろうか。

私は一應次のように考えてみた、佛教遺跡にしる、遺物にしる佛教考古學の對象となるものは、それが現存していた状態から以後何等かの理由によつて長時間——抽象的であるかも知れないが——埋藏されたものが、再び發掘され、過去における佛教遺跡、遺物として考古學的価値を有するものに限つてその對象となり得る可能性がある。

考える。

こういう前提のともに、佛教考古學の對象範圍をもつて先學によつて行われた分類を批判してみると「佛教考古學講座」における構成とはかなり相反するものになる。しかし、そこに擧げられ矛盾を感じていた法要行事編の各宗行事作法史や盆火、佛教音樂、佛像彫刻編における造佛法、あるいはその他の項の佛教教育史、宗教批判の態度等佛教考古學に對する範圍外の項目が抹消されて、一般に持つ概念の矛盾が取除かれてくるのではなからうか。したがつてこの私の考え方からすればそこに擧げられた内容のものは佛教考古學講座とい名稱を用いられているけれど、内容上ではその殆んど佛教考古學と關係のない項目であると判斷せざるを得ないのである。

また「佛教考古學論叢」の内容についても「美濃國古位碑の研究」や「陸前宮城郡の古碑」等は内容的にみて佛教考古學の範圍外のものであつて、こうした佛具、法具だけを別に體系的に研究する學問、私の假定する佛具學の獨立した構成を考えるべきではなからうか。

石田先生の擧げられた項目については明らかに美術、工藝史に屬するものもあるが要するに先きに規定した傳世品と現在品を除外し、埋藏という過程を経たものを對象とするならば何等の矛盾も生じないのではないだろうか。ただそうした場合、袈裟、頭陀袋、經帙、經机等の遺物は殘存する可能性が非常に少くなることは考えられ得る。

日本考古學界では佛教考古學の名のもとに一時古瓦を對象とした研究が盛に行われた時期があつた。最近の學界——その代表的な日本考古學協會の研究發表や日本考古學年報に編集されている内容からみて——その趨勢、動向は寺院址の發掘や經塚の發掘、そして寺院瓦窯跡の發掘が活發に行われている。そしてその發掘遺物として佛像、經典、佛塔、佛具、經具、法具等が検出されている。こうした佛教考古學に對する成果を見聞するにつけ、私自身

もいくつかのこうした佛教遺跡を發掘し、その遺物のあることを報告し、そして佛教考古學に關する講義を開くにあつて、從來漠然として理解してきた佛教考古學に對する概念の規定とその目的、對象、研究法を考えなければならぬ立場になつた。而してここに佛教考古學とその課題について記述したが、要するところ、私の佛教考古學に對する概念はここに示した狹義の佛教考古學をもつてそれとし、佛具を體系に研究する分野と區別すべき必要性を感じた。そして佛教考古學は佛教學、歷史學、考古學の廣い學問體系のなかに於ける各々の内接に生じる佛教史學、歷史考古學、佛具を含めた廣義の佛教考古學が相重つて生じる分野に於ける獨立した體系を佛教考古學と考えてみた。而してその對象の範圍は傳世遺物、現存品等はそのほとんどが所謂考古學的価値に乏しいことを考え、これを除外して所謂埋藏經過を経たものについて考古學的研究を行う必要を認めた遺跡、遺物について、特に佛教に關するものを限定して、ここにいる佛教考古學の對象範圍と假定した。したがつて從來一般に考えられていた佛教考古學より非常に對象の狭いものとならざるを得ないし、そうあるべきものであると考えた。

蓋し限定の中における佛教遺跡、遺物を對象とする考古學の一分野であることを確認し、考古學に主體性をもつことを強調したものである。

# 付記

標題に示す如き内容の論述は淺學若輩の学徒のなすべき業ではないかも知れない。しかし佛門に生を享け、得度出家し、淨土宗の法燈を繼承しながら、考古學徒として將來斯學を歩むことを志し、考古學的研究による佛教及びその文化を究明し、細やかながら佛恩に報じたいと念願する。而して私のもつ佛教考古學に對する考え方を明らかにし、今後の指針、基調としたい。したがつて先輩諸氏の憚りない、御批判を戴き御叱正を得られれば幸甚に存ずる次第である。

(昭和四十年一月五日稿了)